カオルノキミ

黒炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カオルノキミ

【Ｎコード】
Ｎ１５２０Ｊ

【作者名】
黒炭

【あらすじ】
大学生の従姉・サヤカとのお楽しみの為に、東京へ遊びにやってきた受験生の薫。彼を渋谷駅で迎えたのはサヤカではなく、美青年・横田だった。横田に見初められた薫は不意を突かれてしまう。最初は最低な奴！と思ったのだが……　　薫が地元へ帰るまでの数日間の物語。ＢＬ、ボーイズラブです。
※続編『カオルノキミ2』は『カオルノキミ』の目次ページ下部のリンクからご覧いただけます。

1　オッサンと泥棒

渋谷駅、午後９時半。

薫（かおる）は、約束の時間よりもゆうに一時間は早くそこへ着いてしまった。

高速バスを利用しての上京だ。道路は混雑も無く思いのほか順調に進み、３０分は繰り上がって東京駅に着いた。都会での時間の潰し方を思いつけずに素直に渋谷駅に向かい、結局時間を持て余している。

都内に入る前に送った『早く着いたから迎えに来い』のメールを無視している約束の相手、大学生の従姉のサヤカを恨めしく思う。

渋谷駅で有名な「ハチ公」も、周りに群がる色とりどりの人間の群れに圧倒され、すっかり存在感が薄れてしまっている。

真正面に聳える大型書店で立ち読みする気も、そのビルを侵食している珈琲チェーン店で座る気も起きなかった。なにしろ、スクランブル交差点を渡ることすら億劫なほどの人間の多さだ。着替えや洗面具の入った鞄が、この街を積極的に歩くことを困難にしている。

仕方無しに、既に閉店した百貨店のシャッターに寄りかかり読書を始める。汚い地面にその厄介なボストンバックを降ろして、全く進まない『カラマーゾフの兄弟』のページを繰る。どうせ読むなら受験生らしく、『源氏物語』でも開けばいいものを。彼自身、何故自分がその本を手に取ったか、その理由が思い出せない。

それから４０分は経った頃。

先程から妙に自分をちらちら見てきていた隣の会社帰りらしい男が話しかけてきた。

「ねぇ、君、人を待ってるの？」

その妙に粘っこい口調で、彼を酔っ払いだと断定する。酔漢であ

るからには、適当にあしらっても罰はあたらない。この状態の人間は、この世で最も嫌いな種類のものだ。
本に目を落としたまま、適当に頷いた。サラリーマンは、「そうかそうか、」と言いながら言葉を続ける。
「これから一杯飲まない？」
今度はあからさまに無視した。人の話（動作だが）を聞いていない。これだから酔っ払いはたちが悪い。
「君、僕の好みだなぁ……。どう、お小遣いあげるし、一晩……」
その言葉はさすがに無視しがたく、呆れ顔で返事をした。
「オッサン。俺、男だけど」
「だから言ってるんだよ？　オジサン、そういうカンジだから。あ、もしかして、君、経験無いのかな？」
縦にも横にも幅のある脂ののった彼は、つむじからつま先まで粘着質な視線でもって観察してくる。寒気が走り、思わず一歩退く。
屈辱なことに、酔いどれの方が一足早かった。ねじ上げられるように腕を掴まれ、文庫本が地面に落ちる。嫌悪感と苛立ちが全身から噴出してくる。
「……やめろ。大声出すぞ」
「二万……いや、三万円はどうかな。今、手持ち少なくてね……、」
「俺、高校生だぞ」
そんな反論には聞く耳を持たず、彼はシャッターに薫の身体を押しつけ、自身の身体で道行く人の視線を遮って顔を近づけてきた。
「やめろ！　キンタマ蹴るぞクソオヤジ！」
熱くて酒臭い吐息をまともに浴び、我慢の限界を超える。足で彼の股間に強烈な一発をお見舞いしようとした寸前。
若い男の声が掛かった。
「おい、オッサン！　俺の友達に何してんだ！　ケーサツ呼ぶぞ！」
リーマンはビクリと振り返ると、急に離して声の主を探した。
その瞬間、何時の間にか二人の懐に忍び込んだその声の主は、薫のボストンバックを引っ張り出して飄々と去るのだ。

（……火事場泥棒だ）
そう思った薫は、リーマンの不意を突いて泥棒男の後を追った。
一難去ってまた一難、とはこのことだ。

スクランブル交差点に至ってようやく泥棒に追いついた薫は、彼の腕を力一杯引っ張った。
「おい！　俺の荷物返せ！」
しかし、振り向いた人間を見て思わず息を呑んだ。
こちらが気後れするほどの整った顔の男だった。薫自身、自分の顔には自信を持っていたものの、この男の持つ雰囲気にはどうも気圧される。都会風に洗練された全体のバランス、きりりと通った鼻筋に、凛々しい目元。面白みを湛えた唇は、今にも喋りだしそうだった。実際、彼はすうっと口を開いて声を発した。
「なんだよ。せっかく荷物持ってやってるのに。それに、助けたお礼の一つでもして欲しいね」
にこやかに、図々しいことを言ってのけた。
交差点の信号は、歩行者用の青に変わり、回りの人々は様々な方向に向かって歩き出す。
「……はぁ？」
「あんな酔っ払いのエロジジイは最初ッから無視してりゃいいのに。おのぼりさんだなあ。あんなとこで何十分も立ち尽くしてたら、そりゃあ誘われるって。でも、自分の見目の良さを自覚していない鈍感くんでもなさそうだけど？」
先ほどからまともな言葉を発していない薫に対し、男は口早に情報量の濃い言葉を飛び出させる。
いくつか突っ込みたい箇所はあったが、今、真っ先に指摘すべきは一つだ。
「『何十分も』って、見てたのかよ！」薫は赤面する。
彼は、薫に完全に向き直ると、鞄をを地面に置いた。彼自身は荷

物が無く身軽だ。
人々は渦中で立ち止まっている二人を迷惑そうに避けながら歩いていく。
「うん、喫煙所でな。いつまでああして待ってるか見てた。君、真野薫だろ？　サヤカから頼まれて迎えに来た。あいつ、まだサークル抜けられないんだってよ。俺、サヤカの恋人の横田一成。イッセーって呼んで」
「……そんなこと聞いてない。なんでサヤカは俺に連絡寄越さないんだよ。それに、あんたもあんただ。迎えに来てたならさっさと声掛けろよ。あそこに俺がいなかったらどうするつもりだったんだよ！」
怒りを顕にする薫を、どうどう、と宥めるように手を前に出す。
「悪い、悪い。お前が余りにも綺麗な野郎だったから見とれてさ。……メシ食った？」
不機嫌な顔のまま、黙って薫が首を振るのを見るや、横田は顎で「ついてこいよ」と示す。
するすると、点滅しかけた横断歩道を渡っていく。混乱した頭のまま、横田一成の背で人ごみをやり過ごしながら、巨大な交差点を横切った。

2　不意打ち

サヤカと薫（かおる）は、所謂セックスフレンドと言える関係だった。
まだ何も知らない無垢だった薫に性の手ほどきを授けたのが一つ上級の従姉、サヤカだ。お互いの家は町一つ分離れてはいたが、田舎の古い家系である真野家の直系の元には、曾祖母に会いによく親戚が訪ねてきており、サヤカの家族もその中の一つだ。
仲良く遊んでいたものの、なだれ込むのも自然なことだった。可笑しな薫の両親は、それを知っててもなんの咎めも無い。「避妊はしっかりしろよ。」それだけだ。両親はサヤカが大好きだ。
際立って外見の美に恵まれていたサヤカと関っていたおかげで、どうも理想が高くなってしまったのが難点だ。彼女以外とは寝れなくなってしまっていた。その上、彼女は技術も上等と来た。そんなことで、彼女が上京してからはこうして時々彼女のアパートへ遊びに行くのだった。サヤカの方でも彼を呼びつけることもあって、互いが互いを「体の面で」必要としていた。

薫は思い起こす。
サヤカが特定の男を作っているところを見たことが無い。なのに、今、先を歩く見目麗しい男はサヤカの「恋人」だと言った。自分が唯一サヤカを満足させられる男であると自負していた薫は、少々自尊心が傷つけられた。
彼は妙なほど身軽で（しかし軽薄なのではない。しなやかと言った方が近い）、人ごみでも目が行くほどに雰囲気があった。後ろをついて歩くと、それが強く感じられる。黒豹を人間にしたらこのような外見なんじゃないか、と思う。
飄々と前を行く横田は、気まぐれのように道沿いのレコードショップにひらりと入ると、エレベーターの上がるのボタンを押した。5階に止っていたそれは、下に向かってゆっくり降りてくる。

（……話の流れからいってここはメシ屋に行くところじゃないのか？）

ふわり、と立ち止まった横田から香水の香りが漂ってくる。……この甘ったるさは女物だろうか。しかし、薫りはあやふやで物足りなく、男の体に鼻をつけて深く吸い込みたくなる。

そんな自分を可笑しく思い、別のことを考えては、口にした。

「……何でお前がサヤカの恋人なんだよ。あいつが特定の人と付き合うなんてありえねーよ」

横田は、きょとんとした顔を見せた。

「俺たち、別に恋してま～すって訳じゃないから」

「……つまり、セフレってこと？」

「いや、違う。付き合ってるふりしてもらってる。カムフラージュだよ」

「ああ、なるほど。あんた女にモテそうだ」

横田は、じっと薫を見下ろした。横田の方が背が高い。そして、彼は呟くように零した。

「……女になんてモテても仕方ねー」

「まぁね」

同じ感想だった。女性関係をみだらに持つと面倒になるだけなので、薫もサヤカ以外は相手にしない。彼の言い分ももっともだ。サヤカぐらいの女と付き合っている、と言ったら誰も寄り付いてこないだろう、と合点する。

薫の同意に、横田はにやりと笑う。

「ああ、お前、俺と同類さんか」

「そうみたいだね」

その時点で、二人の間には誤解が生じていたのだが、薫は気付かない。

エレベーターが到着し、扉が開いて二人を飲み込む。

先に入った薫は、エレベーターの戸口を手で押さえる。「開」と「閉」のボタンをうっかり押し間違える彼にとっては、後続の人間

を挟み込まないための賢い方法だと思っている。だが、乗り込んだのは薫と横田だけだ。
すぐに閉めるのボタンを押す。
「何階？」
「……俺は、お前みたいなのは嫌いじゃないな」
噛合わない言葉を耳元で囁きながら、ボタンパネル前に立っていた薫の肩越しに、横田は手を伸ばして七階のボタンを押す。例の薫りが深く染み込んでくる。
その近すぎる奇妙な仕草を不審に思って振り向くと、頤を掴まれた。
間髪をいれず、横田はそのまま唇を重ねてきた。
驚いて身を固くした薫をほぐす様に横田の唇は柔らかく溶かしに掛かった。
頬に手を当てられ、口を開かされそうになった途端、はっとして横田の胸を突き飛ばした。
「……なにすんだよ」
目を吊り上げて服の肩口で唇をぐいと拭く薫の神経を逆なでするように、横田は自身の唇をちろりと舐め上げ、色っぽい笑みを浮かべる。
「純朴な反応。ごちそうさん」
「ふざけんな」
横田は、おかしいな、という調子で耳の上を掻く。
「なんだ。お前、ストレートかだったのか」
「は？」
「ま、でも関係ないね。俺、お前のこと気に入ったから」
エレベーターで切り取った夜の街の光と闇を背負って、彼は口角を上げた。
七階に着いたエレベーターは、ゆるゆると扉を開く。茫然自失の薫を引き摺るようにして横田は歩きだした。
（……サヤカ、この俺を放っておいて何やってるんだよ……。）

3　ヨコタ

結局、レコードショップに寄ったのも、横田の注文していた商品を取りに寄っただけだった。もと来た道を辿り、渋谷発の私鉄に乗るとサヤカの下宿先へ向かった。

この全く信用できない男に付いて行っていいものか迷った挙句、先程の行為は田舎者の自分をからかったものだと判断して、従うことにした。

「な、メシ食ってないんだろ？　コンビニでなんか買う？」

「……もういい。遅いし、胃ィもたれる」

「空っぽでもマズイだろ」

横田は、近所のコンビニの前で薫を待たせて、自分は買い物をしている。その時、やっとサヤカからメールが返ってきた。

『遅くなってゴメン！いっせーと合流できた？』

それにはこう返信した。

『できたけど。なんなのあの人。最低なんだけど。今、サヤカのアパートの近くに着いたところ。』

すぐにサヤカからも返ってくる。

『まぁ頑張って。私はもう少し掛かるから。部屋の鍵はいっせーが持ってる。』

これでは電話して直接文句を言ったほうが早い。即座にサヤカの電話番号を呼び出すと、発信ボタンを押した。薫の知らない洋楽が鳴り響き、数秒後に、サヤカの澄んだ声が飛び込んできた。

《ルコちゃん！　久しぶり！　ごめんねえ、迎え行けなくて！》

「その呼び方ヤダ。それより、あの男を遣わした事を謝ってくれない？　俺の大事な唇が奪われたんですけど」

電話の向こうのサヤカは、ぶッと噴出すと、軽快に笑い出した。

《マジ！？　いっせーって慎重派なのに！》

「あのさ、笑い事じゃねえって。からかわれるだなんて、すっごい、

不愉快」
《からかわれてるだけならいいけど。……じゃ、１２時くらいには着くから、それまでにお風呂は済ませて待ってて》
怒っていたはずが、行為を予感させるサヤカの色めいた言葉を聞いたたけで下半身にズキンと、甘い重たさを感じた。へなり、と携帯電話を耳元から降ろす。
頬を染めた薫の頭の上に、買い物を済ませた横田がビニール袋を乗せた。
「なにニヤついてるの？　発情期の犬ッコロみたい」
「……発情期はアンタだろ」
不機嫌な顔を取り繕って見上げても、横田はどこか見透かすように眺める。
「え、さっきの？　たかがキスでさ、プンプンするなって。どこぞのお嬢さんですか？」
「馬鹿にすんな！　何とも思ってねえよ」
薫は、ビニール袋を振り払って立ち上がり、横田を置いてずんずんと歩き始めた。しかし、横田は反対方向に身体を向けると、叫んだ。
「おい、薫。サヤカのアパートはこっちだろ！」

◇

「……あれ、おっかし～な。ポケットに入れてたはずなんだけど」
サヤカのアパートの部屋の前で、横田はパンツのポケットをまさぐって呟いた。上半身は、ちょっとしたジャケットだったが、そこのポケットにも無かったようだ。
薫はその男をまじまじと観察した。さらりとした黒髪は彼を上品に見せたし、横から見る頭の形、首筋、顎から喉元に掛けてのライ

ンが、嫌味なほど綺麗だ。骨ばった男らしい体格も羨ましい。自分と同じく痩せているのにこうも違うのは筋肉のせいだろうか。
そんな視線を送っていた薫に、彼は不意に顔を向けた。凝視を気取られた、とばつが悪い思いで少したじろぐ。が、彼は、頭をぽりぽりと掻いて「てへッ」と言った。
「悪い！　鍵失くしちゃったみたい！」
「……はぁ？　どうすんだよ」
「俺んち泊まればいいよ」
信用できない。
「……ここで待ってればサヤカ帰ってくるし」
すると彼は、満面の笑みを浮かべて「冗談」と言い、首元からネックレス状に繋がれた鍵を取り出した。この意味の無いやり取りに、薫は思わず横田の肩を軽く殴りつけた。

サヤカの部屋はいつ来ても綺麗だった。それはつまり、客人が絶えないことを意味しているのだが。少し、嫉妬で心がちりつく。
狭いワンルームマンションにはソファや観葉植物、ガラスのローテーブル、フロアライトなどが並び、現代風のスタイリッシュな統一感がある。一人暮らしの学生にしてはインテリアに頑張っているほうだ。彼女の家庭は、特筆して裕福なわけではないが、サヤカは自分自身にしろ、インテリアにしろ己の美意識を徹底的に追求するたちなのだ。
横田は、自分の家だと言わんばかりにソファにその身を投じた。コンビニの袋の中から飲むゼリーを取り出すと、鞄を置いたばかりの薫に向かって放り投げた。
「それでもドーゾ。負担にならないから」
（コンビにでは俺の為にコレを買い込んでいたのか……）
「……ありがと、いくら」
「いいって、そのくらい」
言いながら、彼は自分のためのビールのタブを空けるところだっ

た。途端に、感謝の気持ちも霧散してしまった。
「……あんた、居座るつもり？」
「ん？　悪い？」
「悪い。気ぃ使ってくれない？」
彼は、ぷしり、と音を立てて開けると、飲まずにローテーブルに置いた。
「『気ィ使え』ってお前、サヤカとそういう関係なの」
「……だったら何？」
「ふうん。じゃあ、純情な少年って訳じゃないな」
「純情とか、純朴とかやめろって」
呆れた薫は彼に背を向けて黒い薄手のカーディガンを脱ぎ捨てると、鞄から洗面道具を取り出しに掛かった。
その背後に横田が迫っていることには気付かなかった。薫の身体は絡め取られる。
Vネックの白いTシャツの上を、彼の指が這った。耳元で彼が囁く。
「……お前、よく男に誘われるだろ。だって可愛いモンな。むちゃくちゃに犯したくなる。……この澄ましたキレーな顔、ヤラしく歪ませてやりたい」
柔らかく茶色みがかった薫の細い髪を横田の手が梳く。
「おい、横……やめ…」
「何ともないだろ。恥ずかしいのか、」
からかいに一々抵抗するのも馬鹿馬鹿しくなって、「好きにすれば、」と打ちやる。
張り合い無くて離すだろう、と見込んで気を抜いた薫を裏切るように、耳の裏を暖かい舌が走った。瞬間、ギクリと体が揺れる。……ただし、意図に反する甘い、身の震えによって。
この行為も流して無視すれば良かったものを、不覚にも快感を覚えてしまった為、抵抗しないわけにはいかなかった。

4　サヤカ

逃げようとする薫を面白がるように、横田はTシャツの裾から冷たい手を滑り込ませて上半身をまさぐる。抵抗する心積もりとは反対に、体は横田の動きに従順に解れてしまう。こんなに体の自由を効かなくさせる手は初めてだった。

「冗談もッ、たいがいにしろッ……、」

「冗談？　なら笑って見過ごせよ」

背筋が痺れるような甘くて冷たい笑い声を小さくもらす。

いよいよ横田はTシャツをまくりあげ、背に舌を這わせる。その久しい感触に身体は揺れる。悩ましい甘さを漂わせる香水の香りが、思わぬ伏兵となって薫をいよいよあやしくせめたてた。殺した息が漏れてしまうのを、横田は嬉しそうに嘲笑った。

「どうした、笑えないってか？」

耳元で舌を走らせつつ、横田の絶妙な指は直に胸の突起を捕らえた。

思わず薫の首がクン、と跳ねるのを見ると横田は満足そうに白い首筋に唇をつけた。

「俺で感じるなよ。この変態」

「変、態は、……アンタだろッ……！」

「下……見てやろうか。少しでも勃ってたらお前は変態な」

細身の黒のパンツに掛かっている革のベルトを、彼は外しにかかった。じたばたする薫を抱き込むように手を回した横田は、バックルをいとも容易く開かせる。

その時。

ヴーヴーヴー……、と神の助けのように横田のジャケットのポケットで携帯電話が鳴り響いた。

一瞬力を抜いた腕から、転がるようにその呪縛から逃れ出た。新しい下着を引っつかんで浴室に飛び込み、鍵を掛ける。その戸にも

たれ掛かって、荒く息をはく。
その後を追うように、横田が電話で話しながらゆっくりと浴室に向かってきた。
「あー、ウン。じゃぁテーブルの上置いとくわ。……うん、うん、……ああ。いいけど。……はい、じゃあな。おやすみ」
浴室と脱衣所を区切る頼りない戸をコン、と叩かれた。
「薫、楽になりたいだろ？」
「……うるさい。帰れ」
「言われなくても今から帰るよ。サヤカがもうすぐ帰ってくるってさ」
そう言うと、脱衣所の横田の気配はスッと消え、玄関で靴をトントン言わせている。「またな」と声を掛け、玄関のドアを響かせ去っていった。
再び会って堪るもんか、と薫は頭を膝の上に乗せた。
薫は深く息をついて、半分持ち上がりつつあった自身を情けない気持ちで眺めた。
一瞬、手をかけようとしたものの、サヤカがもうすぐ帰ってくることに思い至り、再び風呂場を出て、給湯のスイッチを入れシャワーを浴びた。
確かに薫は、昔から同性からの魔の手の経験が無いではない。しかし、ここまであからさまに、しかも無理やり開いてくる者はいなかった。
もう一度、大きくため息をついた。
東京に来てから、散々な数時間だった。

◇

サヤカは、会うたびに女性として魅力が増していく。
常にショートカットで、中性的な雰囲気で男に媚びない女だったが、どうにもその色香は流れ出てくる。その髪は、今はキャメル系の色に染め上げている。黒のテーラードジャケットに襟元の広く開いたサテンブラウス、ベージュのヒラヒラとしたミニスカートを合わせている。
常に彼女はベーシックな色合いを好む。それが彼女を安っぽく見せなかった。彼女は自分の見せ方を心得ている。
小鹿のような目をぱたぱたと瞬かせて、玄関先で仁王立ちしていた薫を不思議そうに見上げる。彼女はショートブーツをまさに脱ごうとしているところで、靴に指を入れ上半身を傾けている姿勢は、薫にとっては一種の奮わせるものだった。それでも、極めて冷静に抗議を発する。
「なんなの、あの横田一成って奴」
「だから、彼氏」
「嘘」
「まぁ、嘘みたいなもんだけど、……いいじゃん」
脱いだショートブーツを調えもしないで、まだ不服を言い足りない薫を追い抜き居間のソファに飛び込む。薫は、やれやれ、と思いながら彼女の脱いだブーツを並べ、付近に落ちていた消臭用の木炭を放り込んだ。彼女が途中で脱ぎ捨てたジャケットも、彼が拾ってクローゼットに掛ける。
「ビール！　未成年は酒買えないのに！」
細い指でテーブルの上の缶ビールを差すと、非難がましい目で見てきた。
「横田が買ったんだよ。俺じゃない」
「あっそ。……もらうね」
「ご勝手に」
そういう自分もまだ19だろうが、と思いつつ、缶の飲み口に付いている桃色の唇についつい目線はいく。ソファに投げ出した足も、

上等で見惚れる。
　ビールを流し込み、オヤジくさい嘆息をあげた後で満足そうに薫を見上げた。
「……久しぶり。勉強の調子はどう？　どこ行くか決まった？」
「……適当に東京の私立受ける」
「だったら、私と同じ大学にしなよ」
「センター利用方式でならいけるかも。一般は無理」
「案外おバカさんなのね。確実に合格したいなら９０パーセントは取れないと」
　形式っぽく受験の話をしてくるサヤカに、薫は少しやきもきした。今は横田一成について知りたかった。
「それより、あの横田って男を説明しろよ。俺、あいつのせいで散々な目にあったんだけど」
「だから、ただの彼氏っぽい人だって」
「……寝てるの？」
「ん」
　と、微妙な音で曖昧に誤魔化す。それを薫は肯定だと受け取る。
（……やっぱりからかってやがったあの野郎。）
「でもそろそろ彼女役は辞退させてもらうつもりだったし、今日は最後の頼みだったかな」
「なんで？」
　彼女は、缶ビールをコン、とガラスのローテーブルに置くと、目の色をゆっくりと女のそれに変えていった。
「……そんな話、後でいいじゃん。来なよ、薫」
　このきっかけを呼び覚ますサヤカの声が、薫はどうしようもなく好きだった。その声で、鎮めていたものは素直に反応する。
　乱暴に食いかかりたい衝動を抑え、優しく彼女の伸ばした手に手を絡ませる。薫はソファの背に手を掛けると、サヤカの綺麗に張り出した鎖骨に唇を落としていった。

5　誘惑と拒絶

シャワーを浴びていなかったサヤカは、事後にそれを回した。洗いたての頭をタオルでごしごしと拭きながら、彼女はソファに腰掛ける。薫はフロアランプの光だけで本の続きを読んでいた。

「目、悪くするよ」

「いいから。蛍光灯つけないで」

「なんで、」

「……白い光は嫌い」

サヤカは前触れも無く薫の頬に口づけすると、何読んでるの、と本を覗き込んだ。

「ああ、それ」

彼女は含み笑いをする。

「……何がおかしいんだよ。これ全然面白くねえよ」

「高校三年生で理解できない話じゃないでしょう。……私、アリョーシャが大好きでさ」

「こんな人間、現実にいない」

「いたよ。昔のルコちゃんはアレクセイみたいだった」

「どこが！」

「……だから私も誘惑したくなっちゃって。あのきっかけをくれたのはこの本。ま、当時読んだのは児童版だったけどね」

「なんてこった……自分の堕落した人生はこの本から始まってたってのか」

言うほど堕落しているとは思っていない。

「感慨深いね」

「結局俺は誘惑には負けたわけで。……つまり、アレクセイみたいな人間は存在し得ないって事だな」

「さぁ？」

薫は、彼女のひねくれた物語解釈を聞くのが好きだった。

フランス文学専攻のサヤカの本棚には、ランボオだらけだ。また彼女の好きな老舗出版社の文庫本がずらりと並び、青、ピンク、緑など色とりどりの背表紙だ。つまり、西洋文学のみならず、東洋文学や思想にまで彼女の興味は広がっているのだ。

おまけに、薫の大嫌いなフランス映画のＤＶＤも並ぶ。鑑賞させられるたびに、彼女は本当に楽しんで見ているのだろうか、と余計なことに気が回る。何しろ彼女は「あの服カワイイ」、「あのメイクが綺麗」とか、そんな感想を発しては一時停止をかけるのだ。薫としては当然、物語の内容が入ってこない。

勉強しろよ、そう言ってまた、彼女は薫にキスをする。

◇

二人が並んでクイーンサイズのベッドに横になって暫く経った時に、唐突にサヤカは切り出した。まだ薫は寝つけていなかったため、顔を横向けて自分が起きていることを示した。

「イッセーと付き合ってる振りやめるって言ったでしょう？」

「ああ。そうだった。なんで？」

「私、」

仰向けだったサヤカは、身体をねじって薫に向いた。

「私、好きな人できたんだよね。初めて」

「へぇ、で、何で別れるの？」

「呆れた。本気で分かんない？」

心底呆れた様子で、薫の前髪にさらりと触れた。

「だって、抱ければいいんだろ？　わざわざ気にすることないだろ」

「その人一人だけ抱ければそれでいい。他は何もいらない」

「まぁ、俺もそう、だけど。サヤカだけ抱ければいい。分からなくも無い」

ここで彼女はむくりとうつぶせになると、真面目腐った顔をした。
「全然分かってないって。ルコちゃんは、人を好きになったこと無いんだよ。私だけでいい、って言うのも、本当は、私の体しか知らないって意味だからね、それ」
彼女は、ため息と共に被りを振る。
「『その人だけでいい』っていう感覚は、そういう肉体的なものじゃない。心が思うこと。ルコちゃんは全然分かってない。だから、私が『もうこういうことするのやめよう』って言っても、意味分からないでしょ？」
「は？」
「……ね」
「いやいや、何が、『ね』なの？」
今度は、薫が布団をはいで上半身を起こしてサヤカに向かった。
「……もう、エッチはできない、って言ってるの」
「……マジ？」
「本当」
「悪いけど、ぜんっぜん意味わかんねえ」
「意味分からないなら、意味取っ払って意思だけ言ってあげる。『薫とはもうセックスしたくない』」
薫は、完全に固まった。
今になって、隣のうつ伏せで節目がちにしているこの従姉が、別の意思を持った生き物であると意識した。初めてのはっきりとした拒絶を示されて、言いようの無い打撃が内部に響き渡った。
（取り乱すのは格好悪い。……落ち着け、落ち着け、俺）
「……確かにルコちゃんは上手になったし、相性も良いけど、今の私はそれ以外が欲しい。そしてそれは、私の好きな人しか与えてくれない」
つまり、薫ではみたされないのだ、という「返品」。それをうけても、辛うじて冷静な部分が機能してくれた。
「……サヤカも普通の女の子みたいに出来るんだな」

「……今までの自分を少し後悔してる。だから、さっきので、最後にさせて」
（後悔？　なんで？）
「あ、ああ、その、好きな奴と、うまくいけよ」
サヤカは、ふと悲しそうな顔をして薫を見上げた。小さく、ごめん、と謝罪をする。
「謝るなよ。俺が遊ばれてたみたいじゃねえか」
「……ルコちゃんも、好きな人を見つけて、幸せになれ」
何故か、ズキンと、心が痛んだ。その瞬間に、自分の動揺が、「相手」がいなくなることに起因するものではないことに気が付いた。
―――好きだったのかもしれない。自分はずっとサヤカが好きだったのかも。
でも口は勝手にサヤカを応援する言葉をつらつらと連ねていた。
少し沈んだサヤカに声を掛けているうちに、疲れたのであろう、彼女は静かに寝入った。薫は、起こしたままの上半身を彼女の隣に横たえることも出来ず、ただ彼女の穏やかな寝顔を見つめていた。
口に入り込みそうな髪の毛を払おうとして、ぎくりと引っ込める。そのまま、彼女に口付けてしまいそうだった。そのまま、儚いキャミソールを引き千切ってしまいそうだった。
「……寝れるかよ。……好きな奴の隣で、黙って寝てられるかよ……」
薫はソファに移動すると、そこで膝を折りたたんで、顔を埋めた。
彼は泣きたかった。実際に泣いたかどうかは、覚えていなかった。

6　出ようぜ

どうやら、サヤカが自分を揺すり起こしているらしい。眠い眼をこすりこすり顔をあげると、体中が痛かった。もやが掛かった視界で化粧がびっちりと施されたサヤカを見上げる。

「なんで床で寝てるの？」

薫は、ぼんやりと昨日の自分の甘酸っぱい姿を思い出してこっそり赤面した。さらに、一晩たって、自分がセンチメンタルなショックを受けたことに動揺した。つまり、格好悪いと思った。

「あ……水飲もうとして、一旦起きたらそのままソファで寝たっぽい」

嘘をついた。

「ったく、風邪ひくでしょ？」

サヤカは、薫の頬を両手で挟んで自分に向かせると、一語一語ゆっくり言って聞かせた。

「いい？　今から私は学校行くけど、薫は好きに過ごして。鍵は、テーブルの上。失くさないように首に掛けといて」

机上には、昨日横田が首に掛けていた鍵が置いてある。

彼女は不機嫌なときと誘うときに『薫』と呼んだ。当然、今は不機嫌なのだ。ぼんやりと、ライダースジャケットにミニワンピースを合わせたサヤカを目で送った。玄関でワンストラップのハイヒールパンプスを履いたサヤカは、床に座り込んだままの薫に一瞥もくれず出て行った。

今日は土曜日だ。ぼんやり、大学は土曜日も授業があるのか、と思う。

今は１０月で、学期の真っ最中だ。

それでも、サヤカに長く会いたいが為に金曜の終業後に高速バスに乗った。そして月曜の夜のくだり便で帰るつもりだった。

薫は途方に暮れた。初日にサヤカに拒否されて、これからの二泊

はどうすればいいのだ？　蠱惑的な彼女の肢体を見せ付けられて指を咥えて見てろ、とでも言うのか。
　ここは、まっすぐ実家へ帰るのが妥当な解答だったが、このまま敗走したくは無かった。せっかくだから月曜日はサボりたい気もしたし、何より、サヤカを大好きな父親に根掘り葉掘り早めの「凱旋」の訳を聞かれるのが目に浮かんだからだ。彼女が行為を出来ない時でも、滞在期間を短縮したことは無かった。言い訳が思いつかない。
「はぁ……死にてえ……」
　その時、ローテーブルの上の携帯のイルミネーションが光った。消音の上バイブレーション機能もオフにしていたので、危うく気付かないところだった。ウィンドウが示しているのは知らない番号だったが、誰でもいい、何か話をしたい、と思っていた薫は、迷うことなく通話ボタンを押した。
「はい……真野……、」
《おはよう。あ、切るなよ》
　鈍い頭が働いて、声の主を特定したときには既にそう釘が打たれていた。でも、切ることはしない。本当に誰とでもいいから話がしたかった。
「アンタか。横田一成」
《イッセーと呼べ》
　玄関の外の通路の方で人の声が聞こえてきた。サヤカと同じ大学の学生ならば、この頃が出かける時間だろう。
「……あんたは大学行かなくていいの？」
《んなもん、サボる》
「ちゃんと行けよ、親不孝者」
《遊んでいる君に言われたくないなぁ、受験生の真野薫君》
「……うるさい。用が無いなら切るぞ」
（切らないけど）
《待て待て。今、俺、サヤカの部屋の前にいる》
「……」

通路の声の意味を理解した。電話を切ると玄関まで走って行き、チェーンを掛けたままドアを恐る恐る開けた。
するとホラー映画のように腕がニュッと勢いよく伸びてきて、薫の腕を掴んだ。薫は思わず身を竦めた。
「う、わッ！　やめろよバカ！」
「開けて」
案の定、横田がそこで微笑んでいた。
黒のパーカーを羽織り、シンプルな白いTシャツを下に着ている。ストレートでも野暮ったくないジーンズは、細長い足に適度な余裕を持たせて格好良かった。無駄な装飾も模様も無く、作りこんでいない彼の服装は、嫌いじゃなかった。
薫は昨日の「冗談」を水に流すつもりでチェーンを取って彼を招き入れた。
「……アンタいつも手ぶらなの？」
「そ。鞄は持たない主義」
横田は履き古した白のジャックパーセルを、サヤカのように玄関に脱ぎ捨てるとそのままトイレに直行した。薫は、彼の靴の乱れは直さない。
「学校の時はどうすんの。教科書とか」
「ん～。隣の人に見せてもらう」
カチャカチャとバックルを外す音がする。
「それって迷惑じゃない？」
「人が用を足すときも傍で話しかけるのも迷惑。っていうか、さすがに冗談だから。学校も手ぶらってのは」
薫は少し笑って、キッチンでコップを二つ洗った。

ガラスのローテーブルには、ウーロン茶の注がれたコップが二つ。ソファには横田が座り、薫は警戒して地べたの座布団に胡坐をかいて座った。

「何でアンタが俺の携帯番号知ってるの？」
「薫、なんでもかんでも聞かないでまずは考えろ。昨日はお前の迎え頼まれたんだよ、俺。連絡先も知らないでどうやって待ち伏せろって？　……ま、顔は割れてたけど」
意味も無くパーカーのフードを被ると、小ばかにした調子で言った。
「そのキレーな面。見間違えるはずない。サヤカが何度も写真を見せてきた。自慢の従弟だ、って」
「……ふうん」
サヤカが横田に自分を紹介していたことが意外だった。
「……薫さ、ジャージ姿も中々そそるけど、日中の活動時はちゃんと着替えないと気が滅入るぞ」
「いいんだよ、今日は滅入りたいの。放っとけよ」
「昨日の生意気そうな調子が無くなってるね。どうした？　不能にでもなった？」
今なら不能になったほうがましだ、と思いながらも、不躾な横田を睨み付けた。彼は、おどけていた表情をスッと優しげなものにすると、「出ようぜ」と言った。
彼はソファから立ち上がると、勝手に薫のボストンバックを漁ってポイポイ、と適当そうに服を投げてよこした。薄手のVネックのセーターにベージュのパンツだ。薫も、サヤカに倣って装飾や色味が少ないものを好む。
「おい、」
「いいだろ、それで」
「そういうコトじゃなくて！」
彼は、薫の手前まで移動してしゃがみ込み、胡坐を掻いた薫の顔を真正面に見る。
「お前、泣きそうな顔してるぞ」
「嘘……、」
思わず自分の頬に手をやった。横田は、にや、と意地悪そうに目

を細めた。
「う・そ」
「……」
「ふくれんな。田舎モンの薫君に都会を格安で案内してあげるから」
「……別にいいし」
「引きこもるなって。こんないい天気の日に。ほら、そのしみったれたジャージは脱げ！」
あっという間に下着に剥かれたが、隙あらば忍び寄る横田の魔の手から命からがら逃げ仰せ、脱衣所で着替えを済ませた。いい加減、外に出る気にもなった。
一方、横田は脱衣所に向かって叫んだ。
「言っとくけど。俺『も』土曜日は講義無いよ！」

7　地味な東京散策

東京の電車事情に疎い薫は、全て横田の指示のまま動いた。昨夜乗った私鉄で渋谷まで移動し、そこで地下鉄に乗り換えた。

何駅目かで、ぼうっとしていた薫の頭を横田は小突き、降りるぞ、手を引いていく。子どものような扱いも、何故だか気にならなかった。地上に出てみると、そこははしゃいだ雰囲気の場所ではなかった。格好良いスーツ姿の多くの社会人たちが方々へ颯爽と散らばっていく。

「……どこ、ここ？」

「降りた駅くらい確認しろ、この田舎っぺ。半蔵門だよ」

「はんぞーもん？」

「うん。皇居の近く」

「皇居……、なんで？」

「さぁね」

自分で降りといて「さぁね」は無いだろう、と思いつつも彼の背中に従う。

彼の意図は直ぐに読み取れた。散歩だ。それも、人が少ない場所を選んでくれたのだ。横田はその広い背を見せながら何も言わずにのんきに歩いている。朝とも昼とも付かない時間の太陽の光が、深緑色の堀の水面で反射する。猫の毛に包まっているような気の抜けた気分になった薫は、自然、口が緩んできた。

「……俺、失恋したかも、昨日」

「誰に」

こちらを見ずに問いを投げてきた。

「決まってるだろ。サヤカだよ。好きな人できたから、もう、俺とはしたくないって」

「あ、だから俺にも恋人解消して、なんて言ってきたのか。……片恋かぁ」

「それも気付いたのが昨日。ばかみてえ」
「いいことだよ、失恋ってのは」
「どこが。惨めで死にたくなる」
「お前こそ平気で人を振るようなツラしちゃってさ」とおどけるので、薫は、茶化すな、と、彼のパーカーのフードを引っ張って顔を向かせる。横田の場合、表情を確かめたところで、心が読み取れるかどうかは別問題ではあったが。実際、ヘラヘラした表情が張り付いたままだ。
「アンタは、この気持ち味わったことあるのかよ？」
横田は短いため息をすると、失恋の一つや二つ、と呆れるが、「でも、」と。続けて、ぼんやりと口を動かした。
「……泣くほど辛いのは、さすがに無いなぁ～」
「俺がいつ泣いたよ！」
薫は真っ赤になってずんずんと横田を追い抜いていった。その必死な横顔を見た彼は、噴出している。
「なぁ、薫ちゃん。……俺の大学のセンセーが言うには、失恋ってのは長い人生の中で、カラーの記憶なんだってさ。泣くほどの恋をしなさい、ってな。てか、年長者の言葉の半分は神妙に聞き入れるべきもので出来てるんだよ」
「あとの半分は何なんだよ」
「それは俺に聞くな」
「あんたが言ったんだろ」
横田は、ひらひらと意味不明な言葉を落とすので、疑問符ばかりが浮き上がってくる。薫は、うだうだ落ち込む自分がばからしくなってきた。分からないことは分からないし、どうしようもないことはどうしようもない。みっともなく今の気持ちにすがりつくなんて事は御免だ。
そのせいか、自分でも信じられないことを言ってしまった。
「……ねぇ、今日からアンタの家に泊めてよ」
「いいよ」

間髪いれずに返してきた。今度は、立ち止まった薫を横田が追い抜いた。
「……ちゃんと聞いてた？　俺、アンタの家に月曜日の朝まで泊めてほしいんだけど」
「だから、いいってば」
「迷惑じゃ、ない？」
「全然。その代わり、宿泊料は払えよ」
「いくら」
聞こえなかったのか聞いていなかったのか。彼は黙ったまま道端の草をブチリとむしりとった。
「……なぁ、」
「お前も野暮だね。宿泊料っつったら、黙って身体を差し出せって意味なんだけど」
「……そんな常識聞いたことない」
「俺の家の常識」
「俺、男だし」
「でも、したことないだろ？　一回くらいしてみろよ、ハクが付く」
「付いたところで吹聴できるモンじゃねーよ！」
発言を取り消したいほどに、既に後悔し始めた。でも、「……サヤカんちじゃ寝れないだろ」薫の心の内を横田が代弁した。
「かと言って漫画喫茶の使い方は知らないだろうし、ホテルに躊躇(ためら)い無く金を費やすような裕福小僧には見えないけどね～」
「……悪かったな田舎っぺな上に貧乏で」
「別にぃ？」
「……泊めさせてもらうよ、あんたんち。ただし、身は守るけどな」
「守る守らないの問題じゃないでしょ、代価は払えよ」
薫は道端でつんだ、繊維に付着しやすい植物を横田のパーカーに投げつけてささやかな復讐とした。セーターを着ている薫の背にも、既に同じ物がびっちり付けられていることにも気付かずに。

どう歩いたかの覚えはないが、随分歩いていつの間にやら本の街に辿り着いていた。それほど本に興味の無い薫でも、横田の案内によって、随分楽しんでしまった。
物語にすうっと入っていける性質だったら読書も楽しいだろうに、と全く読み進められていないロシア人兄弟の物語を少し思い出してみた。
「そりゃそうだろ、罪の意識とか、思想の根本が違うし」
と、横田。二人は神保町の喫茶店で休憩中だ。薫は運ばれてきたウィンナーコーヒーに浮かんだ生クリームを、スプーンですぐさま溶かす。
「いや、入り込める人は入り込んで楽しんでるでしょ」
サヤカとか、の言葉を飲み込む。
「薫自身の話じゃないの？　……奴らと肩組んで『ああ、分かるぜ兄弟！』って感覚ではないな、俺も。話は楽しいとは思うけど、共感する、とはまた別の話。ま、とにかく最後まで諦めんな！　絶対楽しいから」
「……じゃぁ、あんたは何が好き？」
「うう、ドストエフスキーだったら、『地下室の手記』……？」
「同じ作者なのに？　何が違うんだ？」
「共感できるものと出来ないものには大きな溝があるだろ。経験だよ」
「……そんな単純なもんかよ」
薫は、すっきりしない想いでカフェオレ色になった珈琲に砂糖を一かけ投入した。横田は、ブラックが嫌いと言いつつ、ブラックで飲む。その方が男っぽいだろ、と胸を張る。冗談なのか本気なのか分からない。
「だから……失恋も経験したほうがいいって。世界にもっと共感できる」
「……この惨めさの代償がたったそれだけかよ。こじつけんな」

「ばか、それってすごいことだ！」
珍しく強気に真剣なことを語っていたかと思うと、くしゃりと崩した可愛い顔になった。そんな横田は悪くないと思った。

取り留めの無い話をぽつぽつと続けた。
時計が電車の混雑時間を指す前に「そろそろ出るか」と横田は足をテーブルの内側から引き抜く。斜を向いた姿勢のまま珈琲の最後の一口を啜ると、横田は突然パチンと手で口を押さえて、恥ずかしそうに足元を見る。
「俺、喋りすぎだな、今日……」
「俺だって。……それにしても意外。アンタがこんなジジ臭い東京を案内してくれるだなんてな。てっきり、原宿とかあの辺連れまわされるかと思った」
「なんなら今から浅草行く？」
頭に手を置かれても、今は嫌な気分がしなかった。二人は、初めて一緒に笑った。

8　横田の家へ

薫はあっけに取られてた。なんと横田の家は一軒家だった。随分古くて小さいものではあるが。
「な。お前を泊めても何ら俺に迷惑はないだろ？」
薫は口を開いたまま頷いた。木造一階建て、レトロ風な改装が施してある。かつての同潤会青山アパートのテナント風の趣だ。
「これ、アンタが全部やったのか、改装？」
「いや、友達とかと」
「そりゃ、そうだけど……すげぇ……素人作業かよ……、」
小さな庭をパタパタと歩き回る薫を、横田は目を細めて見つめていた。こんなに誰かに感心されたのは初めてだった。
「薫。お前、建築が好きなのか？　建築学科とか考えてないの？」
「別に！　俺はただのミーハーだよ」
「……ははーん。数学がてんで駄目なんだな」
「……」
「図星か」
薫の肩にずしりと乗りかかると、案内しますよ、と言って玄関を通した。
「……こんな家だし、声、好きなだけ出していいからな」
性懲りも無く甘ったるい声で囁いては耳を舐め上げる。小さく肩が揺れるのが心地いい。
「優しくしろよ」
え、と横田は切り返しに戸惑う。
彼は確かめるように、回した手で顎を掴むと薫の顔をくいと自分の正面に向かせる。薫は真っ赤な顔をして目線を合わせようとしないので流れるようにキスに持ち込もうとしたが。
頤を持ち上げた横田の手を邪険に払いのけて薫は舌を出した。先の瑞々しい表情はどこへやら、ふてぶてしい顔をして言った。呆れ

きった目は半開きだ。
「『う・そ』だよ、バカ」
するすると彼の腕の中から抜け出してしまう。大きな鞄をよたよたさせながら、玄関先に横田を置き去りにしてのしのしと上がり込んだ。一泡食わせた気分で調子がいい。横田が不平を零すのが聞こえてきた。
「可愛くない……！」

横田の香水だと思った薫りは、そうではなかった。インド香だった。道理で欲情させるような薫りな訳だ、と一人で納得する。家屋内を漂う幽霊のように、そこかしこでその香りの濃淡に出会う。そしてそれは彼の衣類や身体に染み付いているのだろう。
この家は、親戚のもう使わなくなった家を借りているものらしい。庭があるため、芸術大学などに進学した友人達が作業場として使いに来ることもあるという。室内も芸術大生の作品がごまんと散らばり、薫にとってはちょっとした美術館だ。クラゲみたいな妙なランプ、どこが正面かも分からない混沌としたオブジェ。
薫には客室用の寝室が宛がわれた。その部屋だけは随分こざっぱりとしていた。彼は言った。
「その部屋が綺麗なのは、サヤカの部屋がいつも綺麗なのと理由は一緒。ただし、俺は間貸ししてるんだけどね。臨時収入ってやつ？」
「……酔狂な奴」
その部屋は逢引に使用されているようだ。そんな幾人もの男女が逢瀬をした部屋で寝るのは気分が悪いが、文句は言ってられない。横田と同じ部屋なんぞに寝ようものなら間違いなく犯されるのだ。
「言っとくけど。その部屋は肩身の狭い同志のためだけに貸してる。意味分かるよな？」
にやにやと笑う横田は楽しそうだ。更に薫にとってたちが悪そうな部屋だった。
しかし、部屋は少しも悪くなかった。荷物を床に置き、歩きつか

れた足を落ち着いて畳に身を投げ出す。その直後に横田が居間から呼びかけている。近所の商店街に夕飯の材料を買いに行こうぜ、と。サヤカの元では毎回外食だったため、面食らった。
「鍋しよ、鍋」
散々歩いたので、もう眠り込みたい気分だった。昨日も満足に寝ていない。
「好きなの買ってきなよ。待ってるし。でも、俺、鍋は葛きり派」
「俺は絶対マロニーちゃんですけど！　どんだけ横着なんだよお前。プチ居候だぞ。俺が来いって言ったら『ハイ、家主様』とか言って素直に従うんだよ！」
何も言い返せず、素直に折れる。
「解ったよ……。体力あるな、あんた」

◇

野菜や肉を準備して両手一杯の食材を買い込むと、よろよろと横田家に辿り着いた。
居間の炬燵がある部屋に電熱コンロを用意すると、台所で切り刻んだ食材を運び込む。
「アンタ、何でもできるんだな。見た目どおり」
横田は慣れた手つきで包丁を扱った。足手纏いになった薫はひたすら野菜洗いや切った材料を仕分けしていた。
「まぁね。一人暮らし長いから」
「今幾つ？」
「知りたい？」
「……どうでもいい」
薫の肩にゴリゴリと摺り寄せてくる仕草が不愉快だった。
「なぁ、薫。いい加減、名前で呼べよ」
「たまに呼んでるじゃん、『横田』って」
「それを言うなら。俺の親父もオカンも兄弟もじいちゃんもばあち

ゃんも『横田』ですけど！」
「……屁理屈。今ここに居るのはお前だけだろ」
「いいから『いっせー』って呼べ」
「アホらし。俺、コレ持ってコンロ見てくるわ」
横田が石づきをそぎ落としたしいたけを、薫は居間に運ぶのだ。
居間は、壁を一周囲むほどの大量の本が並んでいた。彼が読書家だとすぐにわかる。
食事を終えると、風呂を焚きだした。今時アナログな蛇口式だ。お湯の温度の調節が難しい。
風呂場から戻ってきた横田は炬燵に身が縮むほど冷たい足を滑り込ませ、それを薫に擦り付けてくる。薫も容赦なく蹴りを入れて応戦する。
「客人が先に入れよ」
「知ってるか。一番風呂は縁起が悪いんだぞ」
「縁起担いでどうすんだ。……嫌なら俺と一緒に入れ」
「絶対ヤダ。じゃぁ先入る」
「……一番風呂は寒いしな。暖めといてくれよ、風呂場」
薫は、立ち上がりついでに軽口を叩く横田の頭を小突いた。
脱衣所には、ちょっとした洗面台と、昭和期かと思しき派手な黄緑の箪笥が置かれている。洗濯機も緑で今時二層式だ。自分の至極幼い時分を思い出して甘酸っぱい気持ちになる。藤製のバスケットに衣類をぽんぽんと放り込むと、寒さに身を震わせながら浴室に飛び込んだ。存外、風呂場は広く寒々しかった。
ようやく湯船に浸かるようになると、一気に気が緩んで再び眠気が襲ってきた。
……極楽の心持のまま、薫は意識を手放した。

9　翌朝のこと

再び意識を取り戻した時は、既に朝だった。ふかふかのベッドで目を覚まし、一瞬サヤカの家にいる錯覚を呼び起こした。しかし、ここは紛れも無く古い日本家屋、つまり横田の家だった。

「あれ……、俺、記憶無い」

ふと、隣に目をやると薄青く綺麗なまぶたを閉じて横田が安らかに寝息を立てていた。途端、全身から血の気が引いていった。おまけに身体に何も纏っていない。

（……犯（や）られたか……）

焦ってばね仕掛けのように飛び起きたが、自分が浴衣を羽織っていることに気付いた。勝手に前がはだけてしまっていただけのようだ。下着は付けていなかったが。

薫が布団を持ち上げたせいで寒さが忍び込んだのだろう、横田が色っぽいうめき声を上げて目をこすった。

「……悪い。起こしたか」

「……いまなんじ……、」

薫は、目の前の箪笥の飾り棚に乗った古い時計の時間を確認する。時刻は正確かどうか疑わしいほどの年季の入りようだ。それでも、それを信用することにして、素直に読み上げてみる。

「……１０時」

「１０時！？」

横田は、尻に火が付いたかのように飛び起きると、ベッドから抜け出して走りだす。薫は呆気に取られてただ見送った。

頭は妙にすっきりしていた。のそのそとベッドを降りると、キンキンした女性の声が聞こえてくる居間に向かった。横田が食い入るようにブラウン管テレビの画面に見入っているのだ。一々電化製品までもが古臭い。今にもどれかは発火しそうだ。

「……今日なんかあったの」

「朝のアニメ見逃した」
そんなことか、と思いつつ、顔も洗わないまま炬燵に入った。まだ暖かさは巡ってはいない。
「……俺さ、昨日の風呂入ってからの意識が無いんだけど……」
「ああ、お前、風呂で寝てたから」
「寝てた！？」
横田はテレビにかじりつきながら返事を続ける。
「うん。薫がが湯船に入るや否や侵入するつもりで待ち構えてたからさ。入った途端、お前が大口開けて寝てるの見てビックリした。湯あたりする前に見つかったのは俺の性欲のおかげだからな。感謝しろ」
聞き捨てならない言葉も無視して質問を続けた。
「何でわざわざアンタの布団で寝かされてたの？　俺、アンタの邪魔じゃなかった？」
「本当に失神とかだったらヤバイだろ。様子見てた」
「……悪かった。迷惑掛けた」
「本当だよ。『今夜こそ出来る』と思ったのに」
「なにが……、」
聞かなくても分かってるのについ口に出してしまう自分に平手打ちを食らわせたかった。彼が返事をする前に炬燵から抜け出して洗顔に向かうのだ。そして。……いい加減すうすうする下半身に下着をはかせてやらなければ。
洗面所のカレンダーに目がついた。（今日は日曜日か……）明日で東京とも、サヤカともお別れだが、もう一度彼女に会いたい気はしない。諦めがついた。大体、恋でぐちぐち悩むのは薫の趣味ではないのだ。目一杯使える今日は何をしようか、大学見学でもしてこようか、と考えを巡らせる。
もそもそと顔を拭いていると、脛にぞっとするほど冷たい何かが触れた。
「ひ……！」

横田が足の裏をくっ付けてきていた。
「おい、やめろよ！　きたねえな！」
「おっまえ、毛薄いな～！　色素薄いからか？」
「触るなって」
不意に、背後から強く抱きしめられた。鏡で見ると良く分かるが、横田は薫よりも一回りは大きかった。洗顔フォームの匂いに支配されている今は、あの香の香りはしないのに、びくんと心臓がひと跳ねする。その自分の反応は薫を混乱させる。さらさらとした髪の毛が肩口に掛かる。額を左肩に押し付けたまま、彼はくぐもった声で言った。
「……今日、上野行こう」
「……は？」
「上野。美術館行きたいんだ」
「……だからどうして一々若者ずれしたとこばッか行くのかな。まぁ……上野は好きだけど」
「俺の愛するカラヴァッジョ様の絵が見られるんだ」
もそもそとジャージのポケットからチケットを二枚取り出した。だらんと幽霊のようにその手を薫の右肩にぶら下げる。
「一枚、どーぞ」
引き抜こうとしたが、チケットを持つ彼は手の力を緩めない。
「おい、何遊んで……、」
チケットに伸ばした手は横田に捉えられ、恭しく口付けられた。それが余りにも優しいものだったので反論し損ねた。その姿をどう受け取ったのか、彼の口は、振り向きかけた薫の唇をとらえた。金曜の夜の時のように。
「……抵抗しないんだな」
突発的に繰り出される横田のキスに少しも動じないのはいいことか悪いことか。
「したらアンタが喜ぶ。俺もウブっ子じゃないんで」
「すれっからしは可愛くない」

横田の冷えた手が浴衣の様々な、最早何処だか分からないような切れ込みから手を差込まれ、その冷たさに身を震わせる。手から開放された展覧会のチケットは、はらはらと散る。
熟練の手つきでまさぐられた身体は直ぐに熱を持つ。困ったことに、横田は舌を使うことも忘れなかった。肩に申し訳程度に掛かった浴衣を口で器用に剥いでみせる。
「……下着、履いてないのな」
「アンタが履かせなかったんだろ」
冷たい手は、そこに迷いなく到着する。規則的だった吐息が揺らぐのを楽しむようにあやし始める。朝の名残を更に奮い起こさせるようだ。腰の辺りに、だんだんと熱を持ち始めている横田のが接触しているのが分かって、つられるように勝手に自身もピクリと痙攣する。
「……すれかっらしは……相手に、しないんじゃないのか……」
「アホか。自分、鏡見てみろ」
途端に、羞恥がカッと内部に沸き起こった。腰をぬかしたように、急遽しゃがみ込んだ。
「ばか、やめろ！」
「……何だよ。いい所だったのに」
しゃがみ込んだ薫の上に覆いかぶさるようにしてきた横田に体を強張らせたが、彼は落ちたチケットを拾うだけだった。過剰反応した自分を呪いたくなったが、それどころではない。
「薫。１１時には出るぞ。今日は日曜だから混んでるのは覚悟しておけよ」
自分を昂ぶらせておいて飄々としている横田が憎らしかった。ひょっとして、ここ数日、慌ててるのは自分だけではないだろうか。
情けない感情を抱えて、腰には未だ力が戻ってこないのだ。

10　上野にて

日曜日の美術館はさすがに人が多く、遠足の集団も散見できる。そんな小中学生らに対して横田は悪態をつく。
「あんなガキンチョにカラヴァッジョ様が理解できて堪るか」
「いいじゃねーか別に。綺麗な絵だしさ。流行ってるんだよ」
「ばっか！　流行じゃねーんだよ！」
人気のある作品の前には、ルーブル美術館の日常のように人だかりが出来る。並んでいる作品を全て一定の速度で見ていく薫に対して、横田は目録を確認すると、見たい作品だけを選び取ってさっさと進んでいってしまった。二人が見終わるまでには、数十分も差がついてしまった。

もちろん、先に見終わったのは横田だ。
「あんた全部見たの？　こんな機会なかなか無いのに」
「楽しめればいいの」
彼は、エントランスの外で買ったばかりの画集を熱心に読んでいた。そんなものを買うなら実物をじっくり見たほうがいいに決まっている。
「……アンタといると、人生が半分以上楽になる気がするよ」
嫌味のつもりだったが、横田は笑ってありがとう、と言った。
美術館を一巡りし、二人は散歩道を歩き始めた。
お目当ての絵が来日していなかったとかで、横田はえらくご機嫌斜めになっていた。
「そのくらい事前に調べておけよ。俺は彼の本物が見れただけで満足だけどね」
「……生ぬるい。俺は洗礼者ヨハネが見たかったんだ！」
「あっただろ、ヨハネ」

「違う、あれじゃない。俺が求めてたのは、あの二日酔いのように頭が痛そうに座っているヨハネ！　二次元で抱きたい男性像ナンバーワンだ。カラヴァッジョは俺のことを分かってる」
「聖人でしょ、ヨハネ……。……あんた抱かれるわけねーよ。天罰下るって」
抱かれるんじゃない、抱くんだ。と要らぬ訂正をする。
それから、彼は滔々とカラヴァッジョについて語る。彼については伝説やゴシップじみた情報が多いので、話の種には困らない。薫はさほど興味がなさそうに、半分以上を聞き流す。
「知ってるか、薫。著名人は告白している。彼らは幼少の頃、美術品に欲情したってな。だから宗教画相手だろうが、欲情するのは間違っていない。むしろ、何が悪いんだ？　美しさと聖性は須らくエロスと結びつく。俺が言わなくても、もう誰かが言ってることだ」
「生々しいこと言うなよ……」
そんな彼らの暗黒じみた会話とは対照的に、公園では親子連れが楽しそうに声をあげている。まだ小さい子どもがよちよちと、手を差し伸べている父親に向かって歩いている。母親はその傍で聖母マリアのように乳児を抱いて微笑んでいる。
（そういや、俺もああして両親にここへ連れてきてもらったなぁ……、）
横田は、ギクリとするほど優しい微笑で彼らを見ていた。数秒前の穢れに満ちていた表情は地面に落っこちているのだろうか。
「……可愛いよな、子ども」
呟くように言った横田に、見とれていた薫は慌てて言葉を返した。
「俺は子ども嫌いだ」
「お前もガキの癖に」
「アンタも変わらないだろ！」
はた、と思う。こいつはいったいいくつなんだ、と。自分といくつだけ歳が離れていて、どんな経験をしてこんな飄々とした人間になったのか。

薫は、さっぱりつかめない横田という人間に興味を持ち始めていた。何も知らないも同然だ。サヤカと同じ大学かどうかすらも実は確認していない。
「……アンタ、学部はどこなの？」
「どう思う？」彼は振り返って微笑んだ。
「……情緒的だし、不合理だし、理系人間じゃないだろ」
「おいおい、そりゃ偏見だぞ」
「じゃぁ何なんだよ」
「教育」
薫は立ち止まった。すると偶然、落ち葉が彼の頭に乗った。
「……冗談だろ。歩く猥褻物みたいなお前が教育だって？」
「嬉しい褒め言葉だね、薫くん」
横田は、薫の頭上に降りた、まだ薄く緑の残っている銀杏の葉をつまむと、それに唇をつけた。引き攣った顔のままの薫の黒いカットソーの襟ぐりを引っ張ると、その隙間から銀杏の葉を滑り込ませた。
「わ！　何すんだよ気持ち悪ィな！」
薫は焦ってカットソーに裾から手を突っ込むと、落ち葉を引っ張り出そうとした。しかし、横田は服の上から中の薫の腕を掴んだ。ひやりとした瞳が薫の揺れる瞳を捉える。
「……嫌がる顔がそそるんだよ、お前」
「何、」
横田は小指だけをつ、と伸ばすと服の上から右の突起がある場所に軽く爪を引っ掛ける。彼から逃れるように目をきつく瞑って肩を縮めた薫を、息だけで笑った。それだけで、すぐに手を離す。
「……どうよ。そろそろ本番がしてみたくなっただろ？」
「……馬鹿じゃねーの」恨みがましい目で見上げる。
「生娘を安心させるように、お前を慣らしてやったと思うんだけど？　大丈夫、俺、上手いし」
「だから女扱いするな！　別に怖いから嫌がってるんじゃねーよ！

厭なもんは厭なんだよ！」
横田は、肩をすくめて見せると、先立って歩き始めた。ジャックパーセルの裏地の青がちらちらと目に映る。
薫が小走りして追いつくと「……無理強いはしないから」、横田は確かにそう言った。

11　越える夜

夕食は横田のおごりで若者向けのくずし懐石となった。『なった』とは言っても、横田がすでに予約を取っていたのだが。

若い大将が切り盛りしている店らしい、コンクリート打ちっぱなしの立方体の現代風な建物だ。申し訳程度にぶら下がった臙脂の暖簾が無ければ、店だとは気付かない。大通りに面したその店の戸に、横田はひらひらと吸い込まれていく。薫も慌てて従った。

通されたのは、ごく普通のお座敷だ。

「ここって高いんじゃないのか？　しかも個室……」

「無粋なこと言うな田舎っぺ。いいから、美味しいもを食べなさい」

「……うん。……ありがとう」

横田は大らかな笑みを浮かべた。

一品一品、芸術品のような料理が運ばれてくる様に、薫は感動するよりもむしろ慄いていた。しその花をものめずらしそうに箸で突いている。

「受験する大学は決めた？」

「まだ。とりあえず、東京の私立、とは思ってる」

「まだって……もう１０月じゃん！」

「大丈夫だよ」

「おっかねー！」

横田は日本酒をちびりと飲み込んだ。

「学部は？」

「……まだ」

「……大丈夫なの、それ」

「だって、みんな実際、学部なんて後回しだろ。どれだけブランド名がある大学に入るか考えてるぜ？　最終目標は就職、……っていうか、就職してもその先なんだしさ」

「それはなあ……。……色々言いたいけど我慢するわ。まあ、言え

るとしたら、同じ四年間でも、楽しいもの選んだほうが良いに決まってるだろ、ってこと」
「でも先生は何選んでも変わらないって、」
つるりとした椀物が運ばれてくる。蓋を開けると、さっぱりとしたかぼすの香りが立ち上ってきた。個性的な髪形の従業員の若い女性がにこやかに説明しては去っていった。
「適当なんだなぁ、教師ってのは。まぁ、……お前があの本を読み終わったら、決まってるかもな」
「カラマーゾフ？　なんで？」
「さあね。本ってのは、時々、俺達の人生を左右するだろ？」
「そうかな。本自体そんなに好きじゃない」
「……お前、文学部だけは絶対やめろ」
薫は、つるりとした箸と悪戦苦闘して、横田の言葉に気を払えないのだ。鮮やかに火の通された海老を取り落とすと、それはポチャリと音を立てて、透明な出汁の張った椀に再び沈む。

◇

良い料理を食べた後は、腹は心地よく膨れるものである。にも拘らず、電車から降り、夜風に吹かれながら歩くと僅かにメランコリックな気持ちになった。それがどこから来るものか、気付くのは恐ろしかった。
「……薫、明日何時に帰るの？」
不意に横田が、ギクっとさせるような通る声で質問を投げかけてきた。今、まさに自分が何と無く考えていたことだった。
「……何時でも別にいいんだ。アンタは明日学校だろ？　それまでには出るし心配するなよ」
「薫、」

「俺が寝てたらたたき起こしてくれよな」
横田は電柱の傍に立ち止まる。濃い影が伸びてアスファルトに染み込む。薫は急に饒舌になる。
「なぁ、俺、アイス食いたくなった。コンビニ行こうよ。ね！」
「はぁ？　さっき上等なデザート食っただろ。……仕方ないな」
コンビニとは反対方向に進もうとする薫を捕まえた横田は、正しい方向へ足を進めた。

家に辿り着くと、炬燵の電源を早速入れて身体を温めながら買ったばかりのアイスに噛り付く。横田は、棒アイスを咥えたまま風呂場に向かう。戻ってきたときには、それは既に木の棒になっていた。
「なぁ薫、今日で最後だし、一緒に風呂入ろう？」
「ヤダよ！　どうせまた変態行為を働くんだろ。」
「違うよ、薫ちゃん準備知らないだろうし、俺が教えなきゃ、」
「何言ってんの……」
「だから、」
「みなまで言うな！」
薫は、洗面具を抱え込むと浴室に駆け込んだ。
横田が追ってこないのを確認すると、衣服を脱いで寒い風呂場の戸を開けた。シャワーが暖かくなるまで出しっぱなしにしてカタカタ震えた。それが薫の命取りだった。
横田が入ってきたのだ。水の激しく滴る音にかき消されてしまった戸の音は薫の耳には届かなかった。
薫は、後ろから横田にを抱きすくめられ、耳を攻めたてられる。それは強張る暇もないほど鮮やかだった。
「……よせって、」
薫は、横田を振り払おうと身体をよじるが、あっけなく拘束される。
「……もういいや、って思ってるだろ。もう焦らすのはやめねえか」

「んなわけーねーだろ、うぬぼれんな、」
「誤魔化すな。嫌ならあの時のオッサンにしようとしたみたいに俺のキンタマ蹴って逃げろよ」
薫は、それが出来てもしないのだ。
「あんた……やっぱり変態だ……」
「……分かってるから。好きなんて気持ちはいらねーから、楽になってくれよ」
膝からくず折れると、遂に横田に主導権を明け渡した。

二人は何も羽織らずにベッドになだれ込んだ。体の水滴は毛の長いシーツに奪われていく。
薫をベッドに押し倒して、横田は上から見下ろしている。
息の荒くなる薫を冷静なのに深く燃えるような瞳が捉えている。
「見てんじゃねえよ」
「見ないでどうしろってんだ」
顔の前で交差される腕を難なく解きほぐしベッドに縫い付ける。彼は距離を縮める。
薫は、セーブの無い横田の愛撫を内心、心待ちにしていた。熱い何かが、自分と彼とが内部から入れ替わるような口付けを初めての感覚で受け入れる。

もう薫は取り繕うこともせず、走る指や舌、落とされる唇を素直な反応でもって応えるのだ。

11　越える夜（後書き）

素敵な描写が出来なくてすみません。

12　カオルノキミ

朝、薫が目を覚ますと既に横田は起きていて、薫の柔らかい髪を撫でていた。レースのカーテンしかない横田の部屋は朝日で満ちていた。結局薫は例のいわくつきの部屋で寝ることはなかった。

「……起きたか」

目を細めた、悲しくなるほど優しい横田の顔と、夢見心地の柔らかいベッドに包まれている幸せに身震いした。が、同時に昨夜の自分の痴態が思い出されて、薫は一気に赤面した。

「俺、」

「……いいから。ダルいだろ？　寝てろって」

言われてみれば、薫は下半身に異物感があって重たかったし、熱っぽい。ん、と短い音で返事すると、再び眠りに落ちた。

二度寝から目が覚めたとき、隣に横田の姿は無かった。

箪笥の飾り棚の時計は午前9時を指しており、薫は、自分はさっき一体何時に起きたのか、と疑問に思った。家全体が深閑としている。テレビの音も、台所の音も、水音も聞こえない。何故か、風邪で学校を休み、広い家で一人ぼっちが心細かった幼児の頃を思い出した。

横田は家を出たのだろう、寝過ごしてしまったことを申し訳なく思いながらむくりと布団から起き上がった。昨晩から借りていた浴衣がよれよれになって身体に張り付いている。それをずるずると引き摺るように、仕度を始める。

朝食でも作ろうと、冷蔵庫を開けたときだ。玄関がガラリと開く音がした。鼻歌と共に横田が帰ってきたのだ。薫は何と無く出迎えた。

「あれ、起きたの薫ちん」

彼は茶色の紙袋を抱えている。

「あんたこそ。大学は」
「んなもん、さぼるさぼる。君だって今日さぼりでしょ」
まぁ、と口ごもる薫の浴衣の襟を猫のように掴むと、ずるずると台所まで連れて行った。
「言ってくれれば、あんたをさぼらせずに起きて出てったのに」
横田は作業台に果物を並べていた手を止めて、真剣な顔をして薫を見た。
「……なんだよ」
昨日の交わりを思い出して、どうも平常心ではいられなく、目線を外す。
「分かんない？　俺、薫ちゃんと少しでも一緒にいたいの」
「ば、ばかじゃねーの。俺、着替えてくる」
薫は、耐えきれず台所を出た。横田が再び鼻歌を歌いだ。「こなれた男だ」と思い、内心、やれやれとため息をつく。
今日は東京へ来た時と同じ服装だ。洗濯してもらった白のVネックTシャツを着て、薄手の黒のカーディガンを羽織り、黒の細身パンツに慎重に足を滑り込ませる。ふとした瞬間に痛みが走るので注意が要る。今日は、観光をする気分ではなかった。火曜からは学校へ行かねばならないため、早めに帰ることにするのが得策だ。幸い、バスは新宿駅からも出ているため、ここの最寄り駅から私鉄一本で行けた。
居間で炬燵に入ってりんごを食べている横田に伝えた。
「俺、１１時のバスで帰る。世話になったな」
横田は、炬燵の一辺をパンパン、と叩いて座るよう促した。
「いいってことよ。受験の時もここに泊まれよ。……さすがにそん時は挿れないから」
「あんたな……」
薫は炬燵に足を入れると、絡めてくる横田の足をあしらうことはせず、されるがままにした。器用にきられた兎型りんごを、フォークを使わずに素手でつまんだ。

◇

新宿駅には余裕を持って到着した。
百貨店前の連絡通路状のテラスで、二人は柵にもたれ掛かり、ホームに着いては離れていく列車をぼんやりと見ていた。
「……俺、気持ち良かったよ」
不意に、薫は横田に言った。視線は、発車する山手線にあった。
横田は、驚いて猫背を持ち上げるが、しかし、すぐに悪戯っぽく笑う。
「……『男との』に対する感想？　それとも『俺との』？」
「ばか」
薫は顔を赤くして横田から背ける。
「俺、薫が好き」
今度は薫が驚いて横田を見た。言葉は無い。
「……もう一回言ってやる。お前が好きだ」
「……は、」
薫は、笑みとも驚きとも、拒絶ともとれない微妙な音を発した。
横田は風に吹かれている薫の茶色に光った髪の毛を払って微笑んだ。
薫の目ははっきりと困惑に震えている。
「なんで……、何言ってんの、あんた……。なんで？」
横田は少しだけ片眉を持ち上げて軽く笑った。
「何で好きになったいきさつなんて教えなきゃならねーんだよ。好きなら好きでいいだろ。時間も性も理由も関係ねーよ」
「何だよ、全然……全然、そんなのとは違うだろ、だって、あんたは、俺と寝たかっただけだろ……」
「お前と一緒にするな。お前と会うために俺がどれだけ頑張ったか。」

「……しらねえよ、そんなの、……勝手だろ、ずるいだろ、自分だけ……、余裕で、……第一、順番が違うだろ。なんでしてから告白なんだよ」
言葉の後半から、しっかりとした声に戻った薫は、いつものように睨み付けて言った。それでも横田は余裕の笑顔だった。
「順番なんてあるのか？　それにね。俺はズルいからこうして最後の最後に言う事を選んだ。だからもう、お前は、俺を突き飛ばして帰ってもいいんだ。『変態野郎』ってな。悪いけど、俺は全部、自分の悔いの無いようにさせてもらった。人生は楽しく、だからね。……お前は、どうする？」
「俺は……、」
薫は、自分の足元に一瞬眼を落とす。
暫くの間、沈黙が落ちる。横田は、あえてその静けさを受け入れて目を閉じる。
「俺は、……わかんねえ、かな」
「……うん？」
横田は、薫の不意の笑顔に嬉しい意味で面食らった。この少年の笑顔を見慣れていない気がした。
「俺、わかんねえよ。ズルいだとか、好きだとか、……どうするべきかだなんて、さっぱりわからない。でも、はっきりしてるのは、あんたといるのは楽しいし、セックスも気持ちいってこと。好きかどうかに至っては、その感情自体、まだ修行不足だ」
くしゃくしゃと、その柔らかそうな繊細な髪を揉む。
「まだ答えは俺には出せない。逃げてるんじゃなくてだ」
「いつまで、待てばいいんだ？」
「好きにしててよ。その間にあんたに他に好きな奴が現れるかも知れないし。そしたら、俺、また、サヤカん時みたいに、本当は好きだったのに、って後で泣くかも知れない。それでもいいんだ。あんた言っただろ？　失恋はイイコトなんだろ」
横田は、笑顔を取り繕って頷いた。思ったより、自分の心に余裕

が無い。薫はちらと腕時計を確認する。
「そろそろ時間だ」
「あ……そうだな。薫。また東京に来いよ。今度は俺に会いに」
鞄を持って踏み出した薫に、横田は付いてくる気配が無い。
「……なんだよ、ターミナルまで見送ってくれないのかよ」
「そんなことしたら、寂しくて俺はお前を離せなくなる」
ぷ、と薫は噴出した。
「やっと、あんたがおろおろする顔が見られた」
「だから、俺はお前が好きだから……、」
鞄がドサリと落ちる音がする。
薫は横田の襟首を引っ張ると、人目も憚らずに口づけをした。目を閉じる間もない、不意打ちだった。
「……大胆だな」
「お返しだ。一成（かずなり）」
するりと横田を離すと、薫は彼の元を立ち去っていった。
手を伸ばして彼の腕を掴もうとした横田が掴んだのは、薫の残り香だった。ビルの向こうへ消えてゆく美しい少年を思いながら、横田は微笑んで小さく呟いた。

「俺は『浮舟』は御免だよ。早く俺を選んでくれよな、薫の君……」
秋の太陽は、大都会の上空で南中を目指していた。

・・・・・・・・・・・・・・

バスは思いのほか空いていた。運転手は、好きな席に座ってもいいですよ、と言う。

こんなに帰りたくない気持ちは初めてだ。新宿の街をのろのろ走ってたら後ろ髪引かれて仕方ないじゃないか。早く高速に乗ってくれ、早くあいつの薫りを振り切ってくれ。

心を落ち着かせるため、例の兄弟の物語を開く。すると、する、っと紙片が落ちてきた。

「カミュ『異邦人』」

と、綺麗な字で書いてある。間違いなく、横田の仕業だ。

どんな意図があって入れ込んだのかは分からないが、恐らく「読め」という意味はあるだろう。

カラマーゾフの兄弟が読み終わったら、手をつけようと思った。

そんな俺が最終的に志望した学部は、法学部だった。

本の影響？

まさか。ツクリモノに影響されて堪るか。

そして俺は、再び渋谷駅に立つ。……二月中旬のことだ。

今度は古典の単語帳を開きながら。

１２　カオルノキミ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1520j/

カオルノキミ

2011年8月24日03時29分発行